

近隣の自然の変化に目を向ける No. 50

「5月を彩った花々に感謝：Thanks to seasonal flowers in May」

2021年6月9日

変化の多い5月があっという間に過ぎ、数日後には梅雨を迎える時期となってしまった。自然界は初夏に入り、周囲も春の花から夏の花々に入れ替わりつつある。色彩に溢れた春の花たちを見過ごしたわけではなく、撮影したままでカメラに収まっているのだ。そこで、5月に見た花々を数枚のアルバムに収めることにした。

まずはスズラン、ドイツ名の意味は「5月の小さな鈴」。

第2は、5/23に見たモチ（別名レッドロビン）の真っ赤な木の葉。人々の頭上に降り注いだ炎に見えますか？（エル・グレコの絵を参照。この日は、ペンテコステ（キリストの復活に出会い、神を信じた人々の上に聖霊が炎のように降臨した）というキリスト教会にとってクリスマス、イースターと並ぶ大切な日であった。

第3は5/14 早朝の芦花公園。前夜の雨によって霧が立ちこめていた空間に朝日が射して幻想的であった。



エル・グレコ「聖霊降臨」

5月は多様な花が次々と咲いて楽しませてくれた。その一部を紹介する。甘い香りのテイカカズラ、白いヒダが美しい更紗ウツギ、かんざしのようなフジの花、枝一杯に密集して咲くエゴノキ（漢字名は野茉莉?!）。実を食べると“えぐい”が語源（成分のサポニンが原因）。

版木として有名なハウノキの純白の花は、神々しい。ヤマボウシには花（ガク?）の形と色の異なる品種があることを初めて知った。4月に咲くハナミズキと同じ属だが、後に赤い実を付けるかどうか異なる。

今年、色とりどりのルピナスが芦花公園の花の丘に植えられ、訪問者を楽しませてくれた。

公園内では、外来種の花が見られる。オーストラリア原産の真っ赤なブラシの木（カリステモン）。ブラシ部分は柔らかく、コップ洗いはできない。年に2度花を咲かせる点でもユニークな木。

ナツツバキ・別名シャラ（沙羅）、沙羅双樹。仏教の聖樹で、お釈迦様が入滅した場所に生えていたとされる木。

フェイジョアは南米ウルグアイ原産で、銀色のガクに赤い糸状の花が特徴。秋に緑色の実（可食）を付ける。最近、日本でも人気で、各地で見られる。

カタルパ（アメリカキササゲ）は、明治のはじめに新島襄がアメリカから苗木を持ち帰り、徳富蘇峰に株分けし、されに（徳富）芦花公園に贈られた木で、今では10m近くに成長し、たくさんの花を付けている。豆が細長く並ぶ莢（さや）＝キササゲをつける。公園内に、カタルパ保育園がある。